
地獄行きなんて納得いかない！

氷純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄行きなんて納得いかない！

【Nコード】

N1665V

【作者名】

氷純

【あらすじ】

あまりにも不当な判決で地獄行きが決まった。何としても閻魔のバカ面殴ってやる！

地獄行きなんて納得いかない！

閻魔と名乗ったのは確かに厳つい顔をしたバカにデカイ鬼だった。

「ずいぶん悪事を働いたようだな」

ギロリとこちらを睨む閻魔の前に俺は頭に疑問符を浮かべる。

「何を勘違いしてんだこのバカは」

「聞こえとるぞ！」

ビリビリ響く声で怒鳴られる。噂に違わぬ地獄耳。

閻魔は手元の資料をぱらぱらとめくり始める。

「まず、貴様の死因が問題だ」

そう言われて思い出すのはほんの数分前の事。

俺は木から降りられなくなって困っている猫を助けようとよじ上ったのだが、運悪く居眠り運転の乗用車がその木にぶつかり、衝撃で木から振り落とされ頭を強打し数時間後に死亡した。

何の事はない、事故死だ。

「どこが問題なんだよ？」

「自覚もないとは、よからう教えてやる」

一つ目、近くで遊んでいた子供たちにトラウマを与えた。

二つ目、乗用車に乗っていた男の社会的信用をなくした。

三つ目、大量の血を流す事で公園の清掃をさせた。

四つ目、公園を使用禁止にする原因を作り子供たちの遊び場を奪った。

閻魔が苦い顔で言うには俺が死んだことで以上の不幸が起きたという。

「言いかがりじゃねえか！ 一番の不幸は俺が死んだことだろうっ！」

閻魔に食ってかかる。最近の若者は切れやすいとの批判はあるが知ったことか。

「大した損失ではない」

……この野郎。閻魔の隣で腹を抱えて笑っている赤鬼は後で始末

するとして、これで地獄行きなんて不当判決も良いところだ。

「では判決を言い渡す」

閻魔が俺を虫けらでも見るような目で見据える。

「ちよっと待ってくれ」

納得のいかない俺は待ったをかける。

瞬間、足下から嫌な風が吹き上がった。続く浮遊感、閻魔が天井へ登っていく。いや違う。

「ああ、俺が落ちてるのかあ」

一度死んでいるせいかな緊迫感がない。ニヤニヤ笑っていやがる閻魔たちがム力つくので俺は心に復讐を誓った。

「首洗って待っていやがれえ！」

地獄行きなんて納得いかない！（後書き）

主人公が地獄に行きました。

男泣かせで御座います。

不当判決から半日が過ぎた。

地獄はとでもスリリングな所だった。あちらこちらにギネス級の
猟奇殺人犯やらがウロウロしているのだ。

探せば謎に包まれた有名人もいるかもしれない。ジャックさん
か、そんなの。

とはいえ、俺は実際に悪事を働いたわけでもない小市民だから、
そんな方々とお近づきになるつもりはない。

今だってそこかしこに鬼に懲らしめられたのかも怪しい死体が転
がっている。三時間程で復活するらしいけど、事情聴取する気には
ならない。ついさつきそれで殺された人がいたし、罰を与えるため
とかで痛みは現世の倍になっているそうだから。

「ねえ」

声がしたので振り向けば、女顔をした美少年がこちらを笑顔で見
つめていた。

取り繕った笑みだと誰でも分かる。冷や汗は流しているし、口元
もひきつっているのだから分らない奴はバカか閻魔だ。

「ついさつき地獄に墮とされたのだけど、何をすればいいのかな？」
美少年が緊張した面持ちで問いかけてきた。聞こえてくる悲鳴に
いちいち反応しては泣きそうな顔になっている。

母性本能をくすぐるタイプか。現世ではその仕草で数多の女を泣
かせて地獄に堕ちたと見た。なんて奴だ、女の敵め。男の風上にも
置けん。

そもそも俺より美形の男なんて断じて認めない！ よし、女扱い
してやる。

そう密かに決めた俺に美少年はさらに笑顔をぎこちなくしながら
口を開く。

「あの、どうかした？」

「いや、俺が女の子に声をかけられるとは思ってなかったんだ」
言ってから事の重要性に気が付いた。

ここは地獄だ。ここで殺しをすると一回につき刑期が一年縮む。
殺された方は十年伸びるので、殺される弱者は刑期が延びていくばかり。そして事情を知らない俺のようなルーキーは格好の的だ。

もし、目の前の美少年がルーキーの俺を殺そうと考えて近づいたとしたら、今の一言で切れて襲ってきてても何らおかしくない。

こちらら喧嘩もロクにした事のない一般市民だ。抵抗はまず、できやしない。

そうして俺は自分の浅はかさを呪いつつ身構える。よし、いつでも逃げ出せる。

戦えなんて言う奴は罵ってやる。このサディスト！ 鬼……は遠くで何か削ってる。なんだあれ。

その時、美少年の手が動いた。俺は慌てて鬼から美少年へと視線を移す。

「な、何で泣いてんの？」

目の前で美少年が泣いていた。手を動かしたのは涙を拭うためだったらしい。

というか、俺が泣かせたの？

男泣かせで御座います。（後書き）

泣かせたあゝ。いけないんだあ。（指さして言うのがベスト）

いろんな悩みがあるものさ。

「落ち着いたか？」

涙が止まった様子の美少年に声をかける。

「すみません。初対面で女の子だと分かってくれた人は初めてで」

「やっぱり、そういう落ちか」

「え？」

小首を傾げての疑問符を頭を撫でてやることではぐらかす。感動は大事に扱わないと。

裏切られると殺意に変わるから。

「というか君」

「朝貴です、古野朝貴。いいですか、朝貴です朝日ではありません。ああさあきい、ですからね」

何故か熱心に売り込んでくる勢いに飲まれる俺。復唱させられる始末だ。

「とにかく、朝貴は何で地獄に堕ちたんだ？」

名字で呼ぼうとして噛みつかんばかりに睨まれたため、名前の朝貴で呼ぶことにする。

「沢山の人に嘘を吐いたからだそうです」

言いながらまた涙を滲ませて、朝貴は続ける。

「私は性別を偽った事なんてありません。みんなが勘違いするだけで本当の被害者は私です！」

堪えきれず再び溢れ出す涙を拭う朝貴。

不当判決で地獄に堕ちた奴、俺以外にもいたんだ……。

その事実感動するより呆れてしまふ。閻魔のバカ、耄碌してんじゃねえのか？

特に悪事を働いたわけでもないなら根は善良だろう。

俺が地獄行きになった理由も伝えておく。朝貴は自分の事のようにいや、自分の時より更に憤った。

「この古野朝貴、あなたの無実を信じ、たとえ地の果てだろうとお供させていただきます！」

ヒートアップして両拳を握り締め『打倒閻魔』を誓う朝貴。

そんな訳で美少年、じゃないボーイッシュ少女の古野朝貴が仲間に加わった。

それは良いとして、問題はあの鬼だ。

「あれなんですか？」

俺の視線の先を辿ったらしい朝貴が誰にともなく問う。朝貴が俺に「答えまだ？」と言いたげな視線を向けてくるがここは無視する。質問は先生にしましょうねえ。

そうじゃなくて問題なのはあの鬼が持っている2m程の鉄の棒。朝貴との会話中ずっと横目で見ていたがあの鬼は棒を丹念に削っていたのだ。

「ああ、針ですね。きつと」

不意に朝貴が掌を合わせて納得する。

「そうか針地獄に使うのか」

一本づつ鬼が削っているとは。こんなところで職人魂を発揮せずともよかるうに。

俺達の話声に気付いたのか、鬼が振り返ったと思うと針を担いでやってくる。その顔には閻魔達と同種の笑みが浮かべられているのに気付いた。

「朝貴、いつでも動けるようにしとけ」

俺は注意を促して逃げる準備を整えた。

いろんな悩みがあるものさ。(後書き)

次は戦闘かな？

それは禁句だって！

酷薄な笑みを浮かべて俺たちに近づいた鬼はかなり大柄で俺の身長
の倍近くありそうだった。これなら2メートル近い鉄の針を軽々と
持ち上げるのも納得がいく。

「ふはは。男二人で何して——ぐっ」

俺たちに向けて嘲笑を浴びせていた鬼の顔に突如として表れた苦悶
の表情に俺は呆氣にとられる。

見る間に青ざめ土気色になっていく鬼。俺はますます困惑する。

何が起こっている？

「誰が男だあつ！」

犯人が吼えた。そう朝貴である。どうやら男呼ばわりが腹に据え
かねて報復したらしい。

鬼の台詞を中断させたのは高身長故に長くなった弁慶の泣き所への
強烈な後ろ回し蹴り。

鬼の顔が青ざめたのは、逃がすまいと足の小指を朝貴が何度も踏み
つけたから。

鬼が土気色になったのは、奴が屈んで狙いやすくなった股間をす
でに奴が落としていた特大の針で何度も何度も……。

俺は思わず身震いした。実に恐ろしきは女の無知よ。

鬼はもはや自力で立ち上がるも無理そうだ。辛うじて意識を保つ
てはいるもののこれはトラウマものだろう。二度と針を削るうなど
とは考えまい。

同情と憐憫のまなざしを鬼に向ける。鬼の目にも涙、そう特大の
涙が鬼の頬を流れていく。ふと目があつた。それはあるいは必然だ
ったのかもしれない。男同士だからこそその一体感。鬼の目は雄弁に
語っていた。

「この女から助けてくれ、そう言いたいんだな？」
今すぐ実行に移したい気持ちを抑えて俺は聞く。

この一体感は今だけかもしれない。でも良い。だからこそ良いんだ。

鬼はなけなしの力を振り絞って首を縦に振る。そうか、そんなに俺に助けてほしいか。

「朝貴！」

俺の制止に悔しそうな顔の朝貴が振り向く。動きは止まり、俺に泣きそうな顔を向ける。「どうして止めるの？」そう聞きたいはずだ。答えは決まっている。俺が男だからだ。鬼の、奴の痛みが分かるから今は安堵させたい。

「朝貴」

俺はもう一度その名を優しく呼ぶ。

「本場の地獄に住む鬼には温すぎる。懲らしめるならもっと完璧な地獄を見せてやれ」

一瞬キョトンとする朝貴と鬼。すぐに朝貴は自分を取り戻し、言った。

「じゃあ、捻り切りますね」

鬼の顔が絶望に染まる。俺は奴が登場直後に浮かべていた以上の酷薄かつ冷酷な笑みで奴を見下ろし、要求した。

「捻られたいくなければ聞かれたことに答えろ」

それは禁句だって！（後書き）

鬼相手に何しても正当防衛です。

有名人になりました。

鬼から聞き出したところによると、今の天国は人口増加の煽りを受けて新たに人を入れることが出来ない状態らしい。

仕方なく、死者に因縁を付けて地獄に落とし増加をくい止めているんだとか。

「しかし、どうしたものか」

鬼を拷問して5時間が経つ。そこかしこに俺と朝貴の顔写真が貼られ、鬼達は血眼になって探し回っている。

すっかり有名人になってしまった。

「すべて敵になろうと一生ついて行きますっ！」

と、勝手に盛り上がっている朝貴。お前の一生はすでに終わってるから。

「やはり、鬼を首だけだして埋めたのはまずかったか」

「全部埋めるべきでしたね」

朝貴がさらっと怖いことを言う。こいつを怒らせないように決意を固くする。

美形の男だと思ってム力ついたから女扱いしました。なんて事実が知れたら髪の毛一本すら地上に残さず埋められそうだ。

「刑期も縮みますし、いつそのこと鬼達を返り討ちにしますか？」

俺は肘と手首の間に刻まれた刑期を見る。今の刑期は一万とんで九十年、朝貴の言う通り十年短縮していた。

「いや、さっきは不意をついて武器も取り上げたから勝てたんだ。警戒してる鬼相手じゃ返り討ちに遭うのが関の山だ」

力も強く体の大きさは倍以上、急所でもなければまともに痛みも感じない。反則キャラである。

「確かにあの数は難しそうですね」

タイムマンなら勝てるのかお前は？ ああ勝ってたな。

とにかく俺は一般人、鬼と正面切って戦うつもりはない！

「何を考えてるんですか」

俺のあくどい笑みを気味悪そうに見上げる朝貴。

多分、こいつは鬼を痛めつけるのに夢中で俺があれこれ聞き出していた事に気付いてないんだろうな。

「楽しい事さ」

俺はニヤニヤと笑いながら答えた。

さあ、まずは準備を始めよう。

有名人になりました。
(後書き)

企んでいるようです。

ただいま世紀末。

「大変です!」

閻魔は部下の声に対してうるさそうに振り向いた。

「どうかしたのか?」

落ち着いて促す。

長年地獄を仕切り罪人達を送り込んできた。悪人が集まれば何か悪さをするもので部下が飛び込んできたのもその類だろう。

「地獄で鬼が殺害されました!」

部下の顔は怯えきっている。自らの持ってきた知らせに閻魔が怒ることを恐れているようだ。

新入りはこれだから困る。鬼はただでさえ恨みを買っているのだ。事故などで一時的に動けなくなった鬼を地獄の囚人が徒党を組んでリンチすることは稀にあることだ。

「それは昨日すでに聞いています」

「別件なんです!」

部下の慌て振りに閻魔は眉をよせる。この短期間で二名の鬼がやられるとは。

「事故の防止策を練らねばならんなあ」

「そうじゃないんです!」

事故じゃないのか? 閻魔は首を傾げる。ならどうやって頑丈な鬼を殺害するというのか。

「地獄の鬼達が……。」

部下はごくりと唾を飲む。

「鬼達が?」

閻魔が促すのに部下は震える声で答えた。

「虐殺されてんですよ!」

「ヒャッハー」

世紀末を感じさせるかけ声と共に俺は逃げまどう鬼の群へ手製の手榴弾を投げ込んだ。

釜ゆで地獄の燃料に用意された木をくり貫き、同じく釜ゆで地獄の火力調整用に用意されている火薬と針地獄で拾った金属片を混ぜ合わせて詰めた凶悪な代物だ。

着弾地点の鬼達が破片に貫かれて苦しみ出す。すかさず踊り込んだ朝貴が槍代わりの針で急所を貫き弄ぶ。

「ふふふ、悲鳴が足りませんよぉ！」

ノリに乗って頭のネジが緩んだ朝貴が笑う。仲間の俺でも若干怖い。鬼達から本当に悲鳴が上がってる。

「悲鳴がうるさいんですけどぉ？ あはははっ！」

今「どうしろってんですかぁ」と叫んだ鬼よ、どうしようもないから諦める。

心の中で同情しつつも、俺は悲鳴を増やすべく手榴弾を手にとった。

ただいま世紀末。(後書き)

鬼相手に何しても……やりすぎか。

数は力だ！

手持ちの手榴弾にも底が見え始めたので一時撤退。

一方的な虐殺を伴う鬼ごっこは終幕した。

鬼達の犠牲で刑期がかなり縮んだ。お前達の死は無駄にはしない。恐怖におののく鬼達がすぐに反撃を仕掛けてくるとは思えないから、俺たちは針地獄に隠れのんびり休息をとっている。数メートルの針が乱立しているエリアでスペースを確保するため手榴弾で針を折ってある。

「流石に疲れました」

朝貴が欠伸をかみ殺す。頭のネジは締めなおしたので高笑いを響かせることもない。

「残り六千年の刑期か」

元々が一万とんで百年だったから四千百年の刑期を縮めた事になる。倒した鬼は四百十になる計算だ。

「正直、もっと効率良いと思った」「鬼は頑丈でしたからね。威力を上げれば良いのでは？」

朝貴の提案は尤もだがこれ以上は自分も巻き込んでしまう。

「仲間を増やすか」

俺の呟きに朝貴が眠たげな目を向ける。

「地獄行きになった悪人を？」

鬼を虐殺して嘲笑を響かせる奴が言うことが。

「人以外を味方にすればいい」

俺の笑みに朝貴は首を傾げた。

対峙するなり逃げ腰の鬼達に俺は待ったをかけた。

隣には朝貴が控え、周囲を警戒している。伏兵はいないようだ。

「俺は鬼に興味はない。狙いは閻魔の首だけだ」 鬼達は武器を片手に困惑と猜疑心が混ざった視線を俺に注ぐ。

「今まではお前達鬼が閻魔の忠実な部下と思い仕方なく戦ってきたが、いくら鬼を虐殺しても閻魔は現れない。おかしくはないか？ 何故かわい部下がこれほどの仕打ちを受けても自ら戦場に現れないのだ？」

俺はゆっくり鬼達を見回す。目があった鬼には険しい顔で頷いて見せる。

「そう、閻魔にとってお前達鬼は使い捨てなのだ！」
鬼の間に動揺が広がる。

「お前達は使い捨てられるような存在か？ 違っだろう！」
最も動揺している青鬼を指さし俺は問う。

「お前達は使い捨てか？」

青鬼は狼狽えながら首を横に振る。そりゃそうだろう。仲間の鬼を含めて聞かれているのだから、肯定しようものなら後で袋叩きに遭う。

だが、本来敵であるはずの俺の意見に仲間が同調した鬼達は更に動揺が深まった。

「お前も気付いていたはずだ。そうでなければ動揺しないだろう！」
彼らの動揺は俺が始めた突然の演説に対するものだったのだが、他人の心は読めない。周囲の鬼がどうして動揺したかなど他の鬼にも分からないのだ。

俺はただ理由を付けて閻魔への忠誠心を揺さぶっただけだ。

「不満があるから動揺するんだ」

そして、俺は止めの言葉を口にする。

「不満があるなら立ち上がれ！」

鬼達が震えた。

「「おおおっ！！」」

数は力だ！（後書き）

主人公が革命の旗を掲げました。

事の結末。

閻魔はイライラと机を指で叩いている。

地獄についての最後の報告が数時間前。二人組みの連続殺鬼犯が姿を眩ませたと言うものだ。

未だに搜索を続けているのか？ 進捗状況は？

まるで情報があがってこない。

「これだから新入りは……」

閻魔が深々とため息を吐きかけた時、備え付けの電話が鳴った。

閻魔はこの文明の利器が苦手であったが、状況が状況だけに仕方なく受話器をとる。

「閻魔だ。さつさと報告しろ」

「俺たちは使い捨てじゃない。打倒閻魔！」

新入りの声だった。何をトチ狂ったことを言っているのか？

閻魔はシワの寄った眉間を揉み解しながら今度こそ深いため息を吐いた。

俺は雀の鳴き声で目が覚めた。平和な空気である。

「やべ、学校行かないと」

俺が息を吹き返したのは葬儀場だ。地元新聞の朝刊に載ってしまいうくらいには騒ぎになった。何せ二人も息を吹き返したのだから。

どうにも隣の会場も騒がしいと思って覗いて見ると朝貴が俺を見つけて、

「地の果てからでもついて行きますっ！」

とガッツポーズしたのにはつい笑ってしまった。

後日、二人の記憶を総合すると俺達は閻魔に厄介払いされたことが分かった。

閻魔の仕事場を包囲して後一息だったのに残念極まりない。寿命が尽きたら出会い頭にブン殴ってやる。

「当分は死にそうにないですけどね」と朝貴。

何でも質の悪い病気で死んだはずが生き返ってみると綺麗さっぱり治っていたそうだ。

閻魔の野郎、俺達が簡単にはくたばらないよう体を丈夫にしたらしい。

まあ、生を謳歌するのでしょうか。

そこで俺はふと疑問に思う。

「そっぴや何で転生せずに生き返ったんだ？」

地獄で刑期を終えると新しい命として生まれてくるはずなのに。

「どさくさに紛れて地獄から逃げ出した悪人を捕まえる為と聞いていますよ」

朝貴が何気ない調子で言った。

え？ これ続くの？

く完く

よかった。終わった。

くかな？く

うおおおいつ！？

事の結末。（後書き）

終わりです。

別の作品に出すことはあるかも知れないけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1665v/>

地獄行きなんて納得いかない！

2011年7月25日03時32分発行